

ふる～ぶ Fleuve

VOL. 71

2006/1

contents

巻頭特集 吉野川アラカルト 伊予街道を行く

吉野川アラカルト

1

ふる～ぶ編集部がおじゃまします。
助任小学校の巻

4

今月の表紙イラスト 四国のみずへ八十八カ所
善入寺島周辺の水辺

4

ふる～ぶめいと通信

5

橋の博物館 吉野川橋めぐりツアー
竜が行く道

Kochi

らっく エッセイ

6

子供の遊び

ふる～ぶインフォメーション

6

四国ふるさと普請大会が開催されました。

よりよい吉野川づくり

7

第8回 吉野川水系河川整備基本方針が
策定されました。

ふる～ぶひろば

7

ふる～ぶ展開催・おたより



伊予街道を行く



阿波国の地形は、三方を険しい山に囲まれて、隣の国への交通は、不便なところでした。

そんな阿波国に、1585年(天正13)に入った領主蜂須賀家政は、城下町建設とともに、国内の重要拠点に阿波九城を配して、国の守りを固めました。また、1598(慶長3)には、旅人の便をはかり、警察的機能を合わせもった駅路寺を八カ所決めました。その後も、これらの城や、駅路寺との連絡、国境警備などの為に、交通路の整備が行われ、徳島城下の門を起点とした淡路・撫養・讃岐・伊予・土佐街道のいわゆる五街道が整備されました。その五街道だけでは、不十分だったので、町や村を結ぶ脇街道や、峠道が多く生まれたということです。

そのなかでも、伊予街道は、徳島城下から、吉野川右岸(南岸)を西に進む別名「伊予本道」ともいわれる街道で、吉野川とも、とても深い関わりのある街道です。そんな歴史の足跡をたどってみました。



徳島藩主のみた風景

～御巡見北方佐野御界目迄御道筋之図～

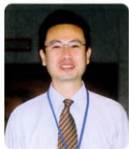


佐野御境ヲ与州見渡(池田町佐野より)

徳島博物館 秋の企画展
「阿波の名称と行楽」/パンフレット転載
(原本個人蔵)

徳島城博物館

根津 寿夫さん



歴史の足跡をたどる前に、まず訪れたのが、徳島城博物館です。伊予街道のなりたちや、見所について、学芸員である根津寿夫さんにお話を伺いました。約15年前から、近世のまちについて、研究し、現在、徳島藩のこと、城下町のことを専門に研究を重ねていらっしゃいます。

伊予街道の特徴としては、吉野川沿いに立地していることで、吉野川の水運と大きな関わりのあることが挙げられます。鉄道も高速道路もない時代、交通機関は、吉野川の舟運しかありませんでした。吉野川の浜では、物資の搬入が行われ、多くの人々の往来で賑わいました。これらの川湊は、山間部の後背地を控えており、川湊に物資を運ぶために、伊予街道から、さらに、山を越え、谷に道が広がっていったと考えられます。

また、伊予街道は、吉野川沿いに立地していたため、洪水の影響を受けやすかった道であったことが挙げられます。伊予街道は、吉野川より低い位置に面していた

ため、洪水で道が通れなくなったり、吉野川を越えて、北岸の撫養街道へ渡りたくても、吉野川が増水して渡し船がでない。何日も足止めされることもありました。

学芸員というお仕事柄もありますが、もともと伊予街道に興味があった根津さんは、何度か伊予街道を訪ね、調べられています。そんな根津さん、10年前の夏の暑い時期、江戸時代の旅人と同じように実際に、3日間かけて伊予街道を歩かれています。全部で、約90kmある伊予街道を歩かれたとは、ただただ驚いてしまいますが、江戸時代の人の旅は、どういふものだったか、体感したかったとか。

根津さんのお話によれば、江戸時代の旅は、日の出前の朝の5時ぐらいに宿を出発。

1日10時間から、12時間歩きました。根津さんも、実際に同じように歩かれたそうです。夏の暑いなか、1日に30kmから40km。足は筋肉痛で、パンパンとなり、足の裏には、水泡ができてしまったそうです。

今は、車社会で目的地へ一直線。交通情報は、車のラジオですぐ分かるし、冷房や暖房もついています。季節のうつろい、吹く風を肌で感じ、暑い日には、木陰で休む。そんな旅をしていた江戸時代の人々。誰よりも贅沢な時間の過ごし方をしていたかもしれません。



①②③ 出発地は、鷲の門

阿波五街道は、どの街道も、鷲の門が出発点。藩主が、街道に出るには、鷲の門を出発した後、通町から、新町橋を必ず通った。新町橋は、徳島城下でもっとも賑やかなところ。文化8年(1811)に刊行された上下2冊の観光案内書「阿波名所図絵」にも、登場している。

①鷲の門、②通町、③新町橋



④⑤ 神後の一里松跡

神後坂は、伊予街道最大の難所といわれていた。旧街道には、今も、落ち着いたたたずまいの住宅が建ちならぶ。川島は、郷町(商業が許されたまち)で、伊予街道の要所であった。と当時川島の浜を要した、吉野川の交通の要所であった。神後坂をほぼ登り切ったところの阿部隆義さん宅の庭には、一里松跡がある。

現在は、別の松が植えられているが、一里松 皇紀二千六百年と書かれた石碑が残っている。一里松は、街道の整備にともなって、約4キロごとに旅人の目印にするために植えられていた。旅人たちにとっては、大きな目印になったに違いない。車で通ると、実感はないが、歩いてみると、その急な様子を実感できる。

④神後坂、⑤ 神後の一里松跡





⑥ 白地の番所跡付近

⑥ 白地の番所跡

近くには、吉野川筋の代表的な川湊、白地の浜があり、船渡し番所があった。この写真は、八幡神社より、白地番所跡付近を見下ろしたものだ。本館、倉庫、年貢米貯蔵庫からなる施設だったといわれている。八幡神社より下りてみると、番所跡は、伊予街道を見下ろす位置にある。「下の伊予街道から、番所、上の八幡様まで、ずっと道が続いていたらしいです」とは、ご近所に住む人の話。八幡様に残る昔の絵の写真を見せてくださった。



⑦ 青色寺(せいしょくじ)

池田町佐野にある近世の阿波の駅路寺のひとつ。

ご住職のお話によれば、蜂須賀家政からの、駅路寺に定めるというお墨付の書状が今も寺には、残っているという。もともと本堂は、今ある場所より高台の場所にあった。明治19年に出火し、現在の場所に移された。もとあった場所のほつてみると、広く街道が見渡せる高台にあり、駅路寺が、国境の要衝に置かれていたことがうかがえる。



⑦ 青色寺



⑧ 佐野番所

国境の要衝であった佐野には、番所や分一所が置かれた。現在佐野番所跡には、標柱のみが残る。

※番所 旅行するときには、必ず身分証明書ともいえる往来手形を身につけていなければならなかった。特に国境近くの番所(関所)を通行する際には、通行手形(通行手形)の確認が行われた。

※分一所 藩内の主要な港や、各河川の川の国境などに置かれていた。現在の税関の役割を果たす場所。番所が人や、物資の移動を監視したのに対し、分一所は、物資に課税的な役割を果たしていた。



⑧ 佐野番所跡



⑨ 国境

境目峠は、両脇が石積みの崖で、切り通しの峠である。峠には、1917年(大正6)に建てられた県境碑があるので、その頃開かれたものと思われる。正面には、「従は東徳島縣三好郡」とあり、左右には、愛媛県川之江、徳島県、三好郡役所への距離が刻まれている。この境目峠手前、南西に分岐する道があり、この道をたどると日ノ岡峠で、阿波、伊予国境になる。こちらのほうが江戸時代には、もともとの街道だったのではという説もある。

江戸時代の当時は、多くの料理店や、旅籠が軒を並べていたが、今は、その影はない。



⑨ 佐野国境

まとめ

徳島城博物館の根津寿夫さんのお話によれば、中世から戦国の世にかけて、道というのは、戦のためのものでした。庶民が安心して通れるものではなく、鎧に身を包んだ武将たちが行き交う場所でした。秀吉が天下統一してから藩政時代に至るまで、国を支配する実力者のもので、庶民のものではなかったのです。この阿波五街道も、当初は、国の整備を固めるものであったとしても、物資が行き交い、商店ができ、人々が行き交うことによって、庶民のまち・道となっていたのです。

吉野川南岸を南北に流れ、消失してしまった道も多くありますが、国道192号と、重なっているところも多くあります。吉野川の風景を眺めながら、今も、残る渡し場跡や、番所跡、神社など、沿道の文化財を訪ね、当時の旅人たちに思いをさせてみるのもいいかもしれません。歴史の足跡を訪ねてみると、反対に新しい発見があるかもしれません。

徳島藩主のみた風景

～御巡見北方佐野御界目迄御道筋之図～



佐野御番所(池田町佐野) 徳島城博物館 蔵の全図集
[阿波の交通と商業]の付録として
(原本個人蔵)

これは、徳島藩主が阿波国の北方、吉野川筋を訪れ、現実目に目にした風景を書かせたものと思われる。徳島藩に残る記録を見ると、藩主の領内巡見の記事は、多くみられ、特に家督を継いだばかりの

新藩主は、国内を巡検する習わしになっていたと思われる。隣国の讃岐や伊予の山々、遠く瀬戸内海を越えて安芸まで、美しい眺望が描かれている。

また、藩の施設である番所や、国境の様子を実写していることは、藩主の巡見行事を考える上で重要。



このコーナーでは、ふる～ぶ編集部が学校や、学習の現場に取材に伺います。

助任小学校の巻!!

渭北町じまん

助任小学校は、藩主蜂須賀茂頼侯が明治4年に、北小学校として、現在地に校舎を起工し、明治13年に助任小学校と改称されました。小学校周辺の地域は、渭北と呼ばれています。助任小学校の3年生は、総合的な学習として「渭北町じまん」の学習をしています。児童140人が徳島河川国道事務所、病院、お寺、他の公的施設など、地域内の調べたい場所を決め、夏に訪問しました。そして、調べたことをまとめ、11月2日に、学習発表会を行いました。

徳島河川国道事務所内には、7月に3年生18人が、訪ねてくれました。担当者から、河川の仕事や道路の仕事、防災センターの役割についてなど説明をしました。質問の時間では、「仕事でつらい事はなんですか?」「橋をつくるのに道具を何種類使いますか?」など色々な質問がでていました。

この取材をもとに、一人ひとりインタビューカードにまとめたり、新聞をつくったりと11月の発表にむけて準備を重ねてきました。

発表会の日は、1年に1度のオープンスクールの日。一日中、保護者も授業を参観することができます。保護者



や関係者が見守る中、やや緊張気味の子どもたち。2時間かけて8カ所～10カ所にわたる発表と報告が行われました。1カ所につき、持ち時間は約7分間。同じ施設を見学していてもグループそれぞれでまとめ方や目のつけどころが違います。徳島河川国道事務所の発表でも、道路の中央分離帯にポイントをおいて話す子、建物について話す子、職員の数を発表したり、写真や絵などを使って説明したりする子などさまざまでした。クイズでは、「(質問)『仕事をしている中で一番つらいことは何ですか?』選択肢1、長時間働くこと 2、おこられること 3、道路をつくる時にそれまで住んでいた人の家の場所をかわってもらわなくてはならない時があること」という問題を作り、他の施設に行っていた子どもたちに質問をしていました。(ちなみに答えは3)

他にも勤務時間のことやアンテナがある理由についても、クイズになっていました。夏の訪問時に質問していたことをうまく取り入れて、他の施設に行った子どもたちや、参観していた保護者の方々にも伝えていました。身近にあっても、見学をして学習をするという機会はなかなか持てない施設がたくさんあります。渭北地区にあるさまざまな施設を見つめ直すよい機会となったのではないのでしょうか。



今月の表紙イラスト 四国のみずべ八十八カ所



88 Watersides in Shikoku

四国地方整備局では、21世紀に残し、地域が誇ることのできる四国のみずべ空間を選定する「四国のみずべ八十八カ所」を平成13年9月から、1年間に渡って募集し、平成15年に決定しています。ふる～ぶでは、西山欣子さんによる表紙イラストにて、「四国のみずべ八十八カ所」をご紹介します。

No.5 善入寺島周辺のみずべ

善入寺島は、吉野川最大の川中島で、古くは粟島と呼ばれ、忌部氏が粟を植えたところ、豊作であったことから、地名がついたとされています。善入寺島から、川島潜水橋を渡った南岸にある川島城あとの城山からは、善入寺島を一望することができ、農地と竹林が美しいコントラストを見えています。

「四国のみずべ八十八カ所」の詳細情報は、<http://www.skr.mlit.go.jp/kasen/mizube88/> まで



ふる〜ぶめいと通信

ふる〜ぶめいとのみなさんは、吉野川が大好きな吉野川ファンの集まりです。

ふる〜ぶめいとの活動は、吉野川や、吉野川流域の吉野川に関する身近な情報をふる〜ぶに提供することにより、吉野川に親しみや、関心を持っていただいて、吉野川ファンの輪を広げていただくことを目的としています。



今中さんは、吉野川市主催の「吉野川バスツアー」に参加したリポートを送ってくださいました。7月からの12回で、延べ156人の方が参加し、毎回大好評で、申し込み者が多く、参加できなかった方もいたそうです。



橋の博物館 吉野川橋めぐりツアー

吉野川市 今中 忠重さん

平

成16年10月に合併した吉野川市が、市内を流れる吉野川に架かる橋と、その風景をめぐるツアーを企画しましたので参加しました。

まず、市の東端にある昨年完成した「西条大橋」へ。景観に配慮したアーチ橋で吉野川にかかる橋では、8番目の長さだということです。次の「阿波中央橋」の途中の「柿原の堰」では、流水を制御する先人の工夫に感心。トラス橋の「阿波中央橋」は、前身の木橋が「絶えず流され、幾多の苦難を乗り越えて、戦後完成した長い橋で南北を結ぶ重要な橋。入り口には、世界的な彫刻家イサム・ノグチ氏制作の男の子と女の子の石像がありました。

「川島潜水橋」を渡って、川の中では日本最大の無人島の善人寺島へ。この島をまたぐのが、吉野川にかかる橋では、2番目に長い濃いブルーのトラス橋「阿波麻植大橋」です。続いては、すっきりとした形状のポピュラーな床板橋の「瀬詰橋」へ。

最後は、西端の「岩津橋」。川幅が狭い所に架けられていて、50年前までは、渡し船が、その後トラス吊り橋が架けられ、平成5年に、巨大な塔から張られたケーブルで支えられた美しい近代的な片つり斜長橋と呼ばれる橋に架け替えられました。

美しい吉野川と共に誇れる、多種多様の橋を持つ新生吉野川市を知る有意義なツアーでした。



電が行く道

つるぎ町 大塩 邦光さん

夏

のよく晴れた昼間、陸地と海の温度差から、海から陸に向かって「海風」が吹きます。特に吉野川では顕著で、東風となって三加茂町付近まで達します。

ここに土佐湾から吹いてきた湿った南西の風が吹き込み、収束して前線帯を作ります。このとき前線帯では、激しい上昇気流が発生し、積乱雲（雷雲）となり、矢野山付近で発生し移動してきた雷雲と刺激あって、激しい雷の発生する帯がつくられると考えられています。

この帯を、私は「電の行く道」といっています。その意味は、この雷雲の発生する前線帯に沿って雷神や竜神を祀った神社が14カ所あることです。古来から夏になると雷の発生する場所があり、恵みの雨と雷の恐怖から、雷神や竜神を崇めたものと考えられています。

ところが、最近では、地球温暖化のためでしょうか。この傾向がなくなりました。昨年は、1回、今年は全く見られませんでした。この研究を通して、地球規模の変化が、このような所にもあるように思います。

RaRaRa Essay

vol.8

子供の遊び

ふる～ぶめいとの安原多恵子さんが

季節によつた様々な話題を文字とイラストでつづります

部屋の中でももの言わず、何時間でもゲームを続ける今の子供達。ゲーム以外に、心の躍る遊びをしたことはあるのだろうか。

昔、私達は外でよく遊んだ。ゲーム機はおろかテレビさえもなかった時代だったのだから、身体を動かしたり、考えたりして遊ぶしか楽しみがなかったからかもしれない。暗くなるまでほとんどの子供達が仲よく遊んだ。

戸外での遊びには、陣取り、缶蹴り、木登り、馬飛び、竹馬、チャンバラごっこ、まりつき、ゴム跳び、縄跳びなどがあり、同じ外での遊びでも川辺では、水泳、魚取り、笹舟作り、水切りなどがあつた。又、屋内では、おはじき、ままごと、お手玉、ぬりえ、あやとりなど数えあげたらきりがいいほどいろいろな遊びをした。そして正月には何故か風上げをした。風上げが何故か正月の遊びなのか不思議に思ったものだが、今考えてみるとたいいてい



遊びはお金のかからないものであるのに対して、風は買わなければならなかったから、お正月のお年玉がそれにあてられたのだと思える。冷たい風の吹く堤防や空地などで高さを競い合った。

そんな遊びのスペースがなくなったり、ともすれば危険性がかりを言われて禁止される遊びが多かったりと、ゲームしかできない子供達に、私達大人がしているのかもしれない。竹馬や竹トンプの作れる子供達にしてあげたいなど昔遊びを思い出しながら今思っている。

安原 多恵子 板野郡飯佐町生まれ、徳島市在住。短歌「松籾」「徳島短歌」「女人短歌」を経て現在「塔」所属。歌集に「さ緑の風」。

ふる～ぶ・infomation

いっしょに考え、いっしょにつくる四国のあした
四国ふるさと普請大会が開催されました。
 (未知普請全国大会2005)

11月
 19日-20日



古来より、四国では、満濃池普請など、地域の共有財産である社会資本を地域の人々が勤労奉仕として、力を合わせて行っていました。また、1200年を誇る遍路文化があり、遍路に訪れる人々に一夜の宿や、お茶やお菓子などをもてなす「お接待」の精神があります。普請の精神に基づき、地域住民と行政が、協働で今後どのように、地域づくりを行っていくかを考える「四国ふるさと普請大会」が、サンポート高松で開催されました。

今回は、四国を中心に、全国からも、ボランティア活動をしているみなさんが、集まりました。

道路はもちろん、河川や公園、港や里山など私たちの暮らしの財産をどうつくり、どう守っていくのか、みんなで考えていくスタートとして、開催されたこの大会のコンセプトは、

1. 地域づくり活動団体の交流・相互連携の促進
2. 地域づくり活動のアピール
3. 社会資本整備の重要性と、“地域と行政の協働”の意義の再確認です。



オープニングセレモニーの後で行われた分科会では、6つに分かれて、

「未来につなげ!人づくりの輪」、「ふるさとをつなぐ山・川・海」など各会場では、活発な討論が行われました。

最後に全体会議が行われ、各分科会成果発表の後、地域での活動は、継続が大切、創意工夫を重ねながら議論を重ね、ふるさとを愛し、未来を見つめていこうと締めくくられました。

よりよい吉野川づくり



第8回

吉野川水系河川整備基本方針が策定されました。

このコーナーでは、
吉野川河川整備計画についての
取り組みについて、ご紹介していきます。

平成17年11月18日、吉野川の河川整備の方向性を定める吉野川水系河川整備基本方針が策定されました。策定されるにあたっては、社会資本整備審議会河川分科会(4月15日)、河川整備基本方針検討小委員会(9月16日・9月26日)において、十分な審議がなされ、10月26日に開催された社会資本整備審議会河川分科会の審議を経ての策定となりました。

以下は、国土交通省河川局記者発表
河川整備基本方針のおもな特徴的内容について、より抜粋

〈吉野川〉

四国4県にまたがり、四国の背骨に位置する吉野川流域は台風の常襲地域であり、過去から甚大な洪水被害を多く経験している。古くは寛の水(1866)、大正元年9月洪水等の歴史的洪水を受け、洪水にかかわる数多くの遺跡が残っている。近年でも、昭和49年9月や平成16年10月の洪水では中流域の無堤部での外水氾濫、下流部での平野の広範囲にわたる内水氾濫等甚大な被害が発生している。また水利用としては四国4県で利用され、四国の社会経済を支える重要な水源となっている。

このような状況を踏まえ、災害の発生の防止として、環境の保全にも配慮しながら築堤、掘削等の必要な対策を行うとともに、既存の洪水調節施設の有効利用も図りつつ、計画規模の洪水を安全に流下させる。さらに良好な河川環境や河川景観の保全に努めるとともに、各種用水の安定的な取水を可能にするとともに流水の正常な機能を維持するため、関係機関と調整しながら、広域的且つ合理的な水利用の促進をはかる。

この河川整備基本方針の策定により、四国地方整備局においては、今後20年～30年程度の河川整備の内容を位置づける河川整備計画の策定に入ります。その過程のなかで、情報の公開、住民の皆さんの参加のもと、検討を進めていきます。

よりよい吉野川づくり(吉野川河川整備計画)
については、徳島河川国道事務所のホームページで詳しくご紹介しています。

<http://www.toku-mlit.go.jp/>



ふる～ぶひろ～ば

ふる～ぶ展開催～出食い ふれあい 再発見～
西山京子さんによる表紙イラスト原画や、吉野川、ふる～ぶめいとの日頃の活動などについて紹介させていただく、ふる～ぶ展を開催します。前回のゆうゆう館で展示していた原画とはまた違う作品も展示いたします。みなさま、是非、来て、見て、触れませんか？

【日時】平成18年1月5日(木)～1月17日(火)
【場所】道の駅 貴光ゆうゆう館ギャラリー

△△おたより△△△△△△△△ 名古屋市 清田八郎さんより

こんにちは。私は船町の別所の大橋の近くに実家のある者です。
幼い頃は、岡田式という、大きい渡し舟に乗って、母の実家の奥中へよく行きました。
徳島を離れて30余年が経過しますが、年に1～2回帰郷の際は、吉野川の水質、魚の
生息状況等が気になり、年老いた父に必ず聞きます。父も若い頃は、夏になると毎日川
に出向き、鮎を釣りに行っていました。
私もよく連れて行ってもらいましたが、朝から川に入り遅りでした。夏になると母が、
弁当を届けに来てくれた思い出があります。プリンの生質の中には、いつも沢山の鮎が
元氣良く餌中を見えていました。
歳が漸くと、そのまゝ、川の水をてのひらですくって飲んだら、吉野川は水質の綺麗な
川でした。
(誌面の都合で一部削ぎさせていただいています)